

第252回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（5）

第2章 パリの下宿に籠る （続） —就職、留学（1920—1924）

福本和夫が1922年から翌年まで滞在した敗戦国ドイツは、どのような状況に置かれていたのか。

第1次世界大戦に敗れたドイツは1919年1月18日に開会したパリ講和会議（五大国、交戦国の日本も参加）において、6月28日に連合国との間でヴェルサイユ条約を調印する。賠償額については会議後に設置された賠償委員会に委ねられた。

1921年5月5日、賠償委員会は敗戦国ドイツに1320億マルク（現在の200兆円超）を課すこと、ドイツは今後30年間で毎年20億マルクと輸出額の26パーセントをマルクではなく「交換可能通貨」で支払うことを決定した。ドイツの財政支出は開戦前の1913年度は35億マルク、休戦した1918年度は455億マルクであり、巨額の国債発行によって戦争を何とか続けていた。平時の約40年分の賠償額を賄うことは不可能であり、当然、賠償金の支払いは滞りがちになった。

賠償金を支払えないのなら、という理由で、1923年1月にフランスとベルギーはドイツ鉱工業の中心地ルール地方を占領した。ドイツはゼネラル・ストライキで対抗する。企業活動、労働者の生活を守るために政府は銀行券の大量印刷を認める。ハイパーインフレが発生するのは必然であった。

大戦中から国債の大量発行によりインフレは始まっていた。卸売物価指数は1913年を100としたとき1918年11月の大戦終了時点で220、1922年450、ルール地方が占領された1923年1月で2800、同年12月には1兆2000億マルクと天文学的なインフレとなった。例えば1923年1月に3400マルクだった牛肉1ポンド（約450グラム）は11月には2800億マルクになった。また、1914年に1ドル4.2マルクの為替レートは1918年11月で7.5マルク、1923年初には2万マルク、8月100マルク、11月10億マルク、年末には1ドル4兆2000億マルクとなった。大戦開始時に比べてマルクの価値は1兆分の1になったことになる。

労働者階級、中間層は貯蓄を失い、最低限の食糧や生活必需品を入手するために何時間も並ばなければならなかった。子どもの栄養失調や餓死が発生した。貨幣価値が急落した1923年後半には給

与が週3回支払われ1日2回となった時期もあった。都市部の住民が農村部に買い出しに行っても、農民は貨幣を受け取らず物々交換でしか応じなかった。

その一方で、大企業や財閥は債務が実質的ゼロとなり、マルク暴落を利用して、動産、不動産を問わずあらゆるものを買ひ漁り莫大な富を築いた。また、ドルなどの外貨を持っている外国人は貴族のような生活が可能になり、美術品、骨董品など高価な品を次々に買い求めた。

生活苦の労働者階級、中間層の多くはハイパーインフレがヴェルサイユ体制に起因するものと受け止めた。このことが後にヒトラーの台頭を許す下地となるのである。

ハイパーインフレを解消するために政府は1923年11月、1兆マルクを1レンテンマルク（「レンテン」とは「地代」を意味する）とする緊急避難的なデノミネーションを行った。レンテンマルクは金、土地との交換はできない緊急通貨に過ぎなかった。しかし、ハイパーインフレは急速に鎮静化した（「レンテンマルクの奇跡」）。翌年、レンテンマルクとの交換レートが1対1である公定通貨ライヒスマルク（「ライヒ」は「国」を意味する）が発行され、1948年まで使用される。

1933年のナチス台頭によって崩壊するワイマール共和国は、政治的には議会制民主主義、国民の直接選挙で選ばれる大統領制が確立され、文化的には「黄金の1920年代」と呼ばれる繁栄の時代を迎える。各分野の代表的人物などを挙げると、美術（ダダ、クレー、カンディンスキー）、デザイン（バウハウス）、文学（クラウス）、演劇（ブレヒト）、音楽（シェーンベルク）、映画（ディートリッヒ）、哲学（ハイデガー）、社会学（フランクフルト学派）などとなる。

しかし、表面的な「明るさ」は1920年のカップ一揆（クーデター未遂事件、先述）、1922年の極右テロリストによる外務大臣ラーテナウ（1867-1922、ユダヤ系実業家、政治家）暗殺、1923年のヒトラー（1889-1945）らナチスによるミュンヘン一揆（クーデター未遂事件）などの「暗さ」に縁どられていたことを忘れてはならない。

さて、福本和夫は留学中にどのような生活を送り何を学んだのか。晩年の弟子、共同研究者である農学者の石見尚は回想する。

福本和夫に留学当時、何をしたかを聞きだそうとしても、彼は言葉を濁してテキパキとした答えが返ってきることがない。
(中略) ルカーチやコルシュとの出会いについて私が質問しても、「コルシュはすぐれていた。本を貰った」と言うばかりで、内容

については口をつぐんでしまった。あまりしゃべりたがらないのはなぜだろうと、私は長く不思議でしかなかった。やっと謎が解けた。

彼は西欧の学者の模倣だと思われることを、心のなかで拒否していたのである。普通、留学といえ、模倣すべき先進専門家を発見し、帰国後、日本に模倣の結果を披露することで箔を付ける例があるが、彼はそれをしなかった。彼はドイツからフランス・パリに移り、買い集めた文献をカルチエ・ラタン（「ラテン語地区」、パリ大学、高等師範学校など高等教育機関が集中する学生街―岩田注）の下宿で懸命に勉強し、ノートを作成した。（石見尚『我々ハ犯罪者ニ非ズ―講座 福本和夫論』文芸社、2010年、38―39頁、タイトルは獄中にいた1935年に釧路刑務所に提出した待遇改善要求書の文言で「思想犯（国事犯）は一般犯罪者ではない」との意味をこめている。）

福本はコルシュから1対1でマルクス主義を学んだ。ルカーチとは第1回マルクス主義研究週間（EMA）で出会っただけだが、そのとき『歴史と階級意識』の初版本を贈られている。コルシュ、ルカーチの思想について論じる前に、福本とコルシュの関係を見ていこう。

フランクフルト学派の研究者、清水多吉は新明正道（1898―1984、ドイツ社会学を東北大学で講ずる）の自宅で留学中の話を複数回にわたって聞いている。新明のドイツ滞在は1929年から2年間であり福本滞在の6年前である。新明ら留学生6人はコルシュの門を叩いた。

この頃、多くのドイツ知識人は生活に困り、家庭教師やら、自宅でドイツ語の塾を開いて生活をやりくりしていたそうである。特に、ベルリンにおけるコルシュの私塾は有名で、この塾ではホルクハイマーも教えていたらしい。多くの日本人留学生がこの私塾でドイツ語に磨きをかけ、かつ、彼らの講義に耳を傾けたとのことである。（清水多吉『柳田國男の継承者 福本和夫―「コトバ」を追い求めた知られざる子弟の交遊抄』ミネルヴァ書房、2014年、6―7頁）

福本のドイツ滞在はハイパーインフレの最中であり、新明の留学時は世界恐慌の真っ只中である。社会情勢は異なるとはいえ、福本の回想、すなわち「彼の家を訪ねる時にはいくばくかの金をもっていった。こちらとしては何とも思っていなかったが、当時の先方としてはありがたかったかもしれない。……暮らしは質素なもので

あった。」（前掲『福本和夫の思想』187頁、再掲）とあるように、ワイマール共和国の知識人を取り巻く経済状況はきわめて厳しいものがあつたに違いない。

清水によると、新明は『ワイマール・ドイツの回想』（恒星社厚生閣、1984年）の中で「福本和夫氏の在独中の先生として日本でも名前の知られていたコルシュ氏」（1966年記）と述べており、さらにコルシュ本人が1951年にルート・フィッシャー（1895－1961、1924年から翌年にかけてドイツ共産党党首、スターリンによって失脚）宛てに福本和夫のことを「1923年の最良にして、最も忠実な生徒」と評しているそうである。コルシュは優秀な生徒を連れてイルメナウで開かれたEMAに参加したのである。

石見が回想するとおり福本がドイツ留学中に何をしていたのか詳しくは不明である。宇野弘蔵（1897－1977、マルクス経済学者、『資本論』研究を原理論、段階論、現状分析の3分野に分けてイデオロギーから切り離し、科学としての経済学を目指す手法は宇野学派と呼ばれる）の証言は残された数少ない手がかりである。

1924年、福本と宇野は留学からの帰国途上に香取丸で出会う。宇野はロンドンから、福本はマルセイユから乗船した。

これはぼくが福本君から聞いたことだが、彼はヒルファァーディング（1877－1941、マルクス経済学者、医師、『金融資本論』（1926年）で有名、1923年から11月に大蔵大臣－岩田注）のところにストウンデ（Stunde、時間－岩田注）を取りにいったというんだ。ストウンデというのはドイツ語などを時間ぎめで習いにいくことなんだが、その当時は戦後のインフレで相当えらい人でもやっていたが、大学の教授や政治家がやっていたのは聞いたことがなかった。しかし昔、相当の本を書いたようなえらい人でも生活に困ってやっていた。福本君はそれをヒルファァーディングのところへもって行って「自分は忙しくてだめだ」（笑）とことわられたというんだ。その前後に大蔵大臣をやる社会党（ドイツ社会民主党－岩田注）の領袖のところへ行ったというのだから驚いた。ぼくはむしろそういう点で感心したね。（『資本論五十年（上巻）』法政大学出版局、1970年、239－240頁）

確かに福本には、帰国後に経済的に安定した教授の職を投げうってアカデミズムから「一寸先は闇」の政治の世界に飛び込んだように、人を驚かせる無謀さ、大胆さがある。しかし、福本はいきなり大物政治家に会いに行ったわけではない。コルシュはヒルファァーディングが委員の一人だった社会化委員会の助手を務めていた。「社会化」とはワイマール共和国における男女普通選挙、基本的人

権、社会権（世界初の団結権を含む）の保障などを通じた社会改良政策の実施を指す。福本がコルシュの紹介でヒルファーディングを訪ねた可能性がある（栗木安延「福本和夫のドイツ留学と日本マルクス主義」1999年、前掲『福本和夫の思想』所収、259頁）。

コルシュ、ルカーチはどのような人生を歩み、いかなる思想を展開したのか。2人の思想を丹念に辿るのではなく、そのエッセンスを論じることにしよう。哲学用語が続く箇所は読み飛ばしていただいて構わない。

1886年にハンブルグ近郊で父が銀行頭取の家庭に生まれたコルシュは、イエナ大学で法学博士号を取得後の1912年にロンドンに渡って研究を続けた。滞在中は、イギリス中産階級の社会主義知識人のサロンの役割を果たした、暴力革命を肯定する教条主義的マルクス主義に対抗して漸進的な社会変革を唱えるフェビアン協会（1884-）の会員になっている。第1次世界大戦では軍務に就き、反戦言動で予備役少尉から下士官に降格され前線で2度にわたり負傷した。戦後の1919年にドイツ独立社会民主党に入党、1920年にドイツ共産党との合同により自動的に共産党員になる。コルシュ自身は共産党との合同に反対の立場だった。

1919年にイエナ大学の教授資格を取り、私講師としてヘーゲル哲学、マルクス主義法学、国家論、資本論の講義を担当し、1923年に正教授に就任した。1924年にチューリンゲン州政府の法務大臣、翌年に共産党国会議員になり正教授の職を追われる。1926年にソビエト連邦を帝国主義と批判したため共産党から除名、1933年に国外亡命し1961年にアメリカで死去した。亡命後は強硬な反共主義者となった。

コルシュの代表作はEMAで草稿が議論された『マルクス主義と哲学』（1923年）である。この後で論じるルカーチ『歴史と階級意識』（1923年）も同様だが、マルクスの1844年の手稿『経済学・哲学草稿』（1933年に出版、「疎外」論の提唱、なお翻訳語「疎外」は福本の考案による）、マルクス・エンゲルスの草稿『ドイツ・イデオロギー』（1926年に出版、「物象化」論の萌芽）を当然知ることなくコルシュ、ルカーチは新しいマルクス主義哲学を構築しようとしたのであり、二人の構想力には驚嘆するばかりである。（疎外論から物象化論への推移を解明したのが世界的なマルクス学者の廣松渉（1933-1994）であり、独自の共同主観的四肢構造の哲学を編み出した。）

『マルクス主義と哲学』の結論（と思われる箇所）を引用しよう。哲学は自由を求め人々を解放する闘いの一翼を担わなければならない、と主張している部分である。

哲学は自己以外のなにものも捉えることのできない哲学的理念の思弁的活動ではないのである（カントの観念論的哲学の批判―岩田注）。理論的批判と実践的批判、これら両者を不可分に関連しあった行為としてつかみ、しかも抽象的意味の行為ではなく、ブルジョア社会の具体的・現実的な変革としてつかむこと、これこそ、マルクスとエンゲルスの科学的社会主義の新しい唯物弁証法的方法原理をもっとも的確に表現したものである。（『マルクス主義と哲学』未来社、1977年、125頁）

今日から見れば、取り立てて評価すべき箇所のない平凡な議論である。マルクス主義を哲学的思考で補強するこのような考え方は珍しくもないが、当時は斬新な発想だった。

コルシュは「われわれは、唯物論の視点から導かれるヘーゲル弁証法の体系的な研究を、組織しなければならない」とレーニンの1922年の言葉を掲げているにもかかわらず（前掲67頁）、『マルクス主義と哲学』全編を通して弁証法が徹底されている印象を受けない。コルシュは思想家でもあり、かつ主体的な実践、労働者階級の意識性（プロレタリアートの階級意識）に基づく自立的な運動を重視する活動家でもあった。個々人の主体性への着目、これこそが一党独裁型の革命（分派を許さず除名を繰り返す）を目指すソビエト型マルクス主義とは異なるコルシュ、ルカーチらを先駆者とする西欧マルクス主義の大きな特徴であった。

ルカーチの哲学はコルシュのそれに比べてヘーゲル弁証法が色濃く反映されている。

1885年、ルカーチはハンガリーのブダペストでユダヤ系家庭に生まれる。父は銀行頭取を務めていた。当時の上流ユダヤ系資本家の慣例として貴族の称号を獲得した父に反発するルカーチは、ブダペスト大学の法学部から人文学部へ転じて文芸批評、演劇理論を精力的に執筆する。ベルリンに2回留学し、ジンメル（1858－1918、ウェーバー、デュルケームと並び称される社会学者、バルクソンやディルタイとともに「生の哲学」を唱える）、ブロッホ（1885－1977、マルクス主義哲学者）と出会い、『魂と形式』（1910年）、『小説の理論』（1915年）を発表して注目される。1913年からはハイデルベルグでウェーバー（1864－1920）らと交流し、1915年からはブダペストで文化革新によって人間の魂を資本主義文明の危機から救済することを目指した。

第1次世界大戦、ロシア革命によって思想的動揺を体験したルカーチは1918年にハンガリー共産党に入党した。翌年のハンガリー革命でクン・ベラ政権の教育人民委員（大臣）に就任するが、革命政権は僅か133日で崩壊。ルカーチはウィーンに亡命して、

1920年代を通じて活発な文筆活動を続け思想を鍛えていった。亡命生活では常にピストルを持ち歩かなければならなかったという。マルクス主義の名著と言われる『歴史と階級意識』（1923年）はその最大の成果である。1924年、第5回コミンテルン（共産主義インターナショナル、コミンテルンについては後述）でコルシュらとともに理論的な修正主義者として弾劾され政治的影響力は失われていった。その後、モスクワからベルリンへ、ナチスを逃れて再びモスクワへと移り、ロシア科学アカデミー哲学研究所で文学史、美学などの研究に取り組む。待遇はよいとは言えなかった。

第2次世界大戦後、ルカーチはハンガリーに帰国してブダペスト大学で教鞭を執り知識人の間で次第に強い影響力をもつようになった。1956年のハンガリー動乱（ソビエト連邦と傀儡政権に対する民衆蜂起、政府側がソ連軍に鎮圧を要請）において革命側に参加するが、ソ連軍侵攻後にルーマニアへ亡命。翌年に帰国を許され政界からの引退を余儀なくされた。1971年にブダペストで死去。

ルカーチは本格的に議論を展開する前に「最も本質的な相互作用は歴史過程における主体と客体との弁証法的関係である」（『歴史と階級意識』白水社、1975年、25頁）と宣言する。これこそがの歴史的名著の全編を貫く通奏低音になっている。

資本主義においては、具体的な人間活動、人間関係が商品を媒介するモノの自己運動、モノ的諸関係のように現象する（「物化」「物象化」）。具体的な生産関係の物象化は生産関係の物象化（抽象化、合理化、孤立化、固定化）をもたらすばかりでなく、政治、国家権力、法の物象化、学問やイデオロギーの物象化をもたらす。

ルカーチはこのような具体と抽象の分裂から社会、そして経験の「全体性」を回復させようとする。思考と存在、当為と事実、理論と実践、主体と客体といった二元論、全体性の分裂は乗り越えられなければならない。「人間の本質はその現実においては社会的諸関係の総体である」（マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」第6テーゼ、1845年）とするならば、その担い手は資本主義の矛盾を一身に引き受けるプロレタリアートとなろう。

ルカーチは、人間的実践を骨抜きにして社会革命の自然成長的到来を想定する正統（俗流）マルクス主義を批判して、主体的人間の実践を貫く革命的弁証法の構築を目論む。歴史過程における主体と客体の相互作用という弁証法（分裂から統一へ）はプロレタリアートの階級意識がもつ革命的機能を照射し、人間の主体性（主体的実存的意識）に生命を吹き込む。

主観的ラディカリズムとして批判されることもあるルカーチの思想は結果的にはエンゲルスの自然弁証法を否定する。弁証法は歴史過程（主体と客体の相互作用）の場のみで存在し、自然における弁証

法はそもそも存在しない。1924年にジノヴィエフ（1883-1936、レーニンの側近、スターリンとの権力闘争に敗れ粛清）が「極左的傾向」「修正主義」と非難してルカーチの思想を否定したのは、マルクス・エンゲルスの弁証法に立脚するソ連の立場としては当然であった。ルカーチは政治的影響力を失ったとはいえ、『歴史と階級意識』による問題提起はフランクフルト学派、実存主義、西欧マルクス主義などさまざまな思想的潮流の源流になったことは疑いない。もちろん、福本思想も例外ではなかった。福本がコルシュやルカーチの思想から学んだのは、キーワードを挙げるならば「主体性」と「全体性」の「弁証法」であった。

議論を少し先じて、ここで「レーニン主義」と「ルクセンブルク主義」の違いを論じることが帰国後の福本イズムの理解に役立つと思われる。細かな議論はさておき、レーニン主義は前衛党主義（分派を容認しない民主集中制、「民主」と銘打ってはいても実際は権力の「一極集中（中央集権）」に重きを置く強固なトップダウン）、ルクセンブルク主義は民主主義的な労働組合主義（選挙による議会政治を容認するボトムアップ）と押さえておけばよい。前者は無謬の前衛党が労働者組織に革命理論を注入する運動論である。後者はプロレタリアートの階級意識の醸成に基づく組織論であり、主体性を重んじる点で西欧マルクス主義に親和的といえよう。むしろ現実にはこのような単純きわまりない二元論は通用しない。ロシア革命の成功、スパルタクス団蜂起の失敗はレーニン主義、ルクセンブルク主義の優劣とは直結しない。当時のロシア、ドイツの置かれた状況は大きく異なるからである。後に論じることになるが、福本イズムは国内的にはレーニン主義的、対コミンテルン（対ソ連）ではルクセンブルク的であり、第2次大戦後の福本の思想はルクセンブルク的であったと言えようか。

第2のエピソードが長くなり過ぎたようだ。

1922年3月に横浜港を出発した福本和夫より4ヶ月早く、前田寛治は榛名丸で横浜港からヨーロッパに向かった。行先はパリである。前田が帰国したのは福本の帰国から11ヶ月後の1925年8月。留学期間は福本より1年以上長い。

経済的困窮（関東大震災で送金が滞ったことも原因の一つ）のため各地の美術館巡りができなかった前田は、パリ郊外オベールのゴッホの墓を訪ねた以外はほとんどパリを離れなかった。画家仲間では小島善太郎（1892-1984）、里見勝蔵（1895-1951）、中山巍（1893-1978）、佐伯祐三（1898-1928）、中野和高（1896-1965）、宮坂勝（1895-1953）ら交流した。1896年生れの前田とは同世代であり、しばしばバカ騒ぎに興じ互いを励まし合ったという。前田たちが帰国後の1926年に立ち上

げた「1930年協会」は佐伯、前田の夭逝によって1930年に発展的に解消し「独立美術協会」に引き継がれ現在まで続いている。

学生時代には頻繁に下宿を行き来していた福本と前田は、福本が松江に赴任すると疎遠になっていた。1923年5月、前田はベルリンからパリに留学先を移す福本を駅（パリ北駅か）で出迎えた。パンテオン、リュクサンブール公園に近く、セヌ川の向こうにノートルダム大聖堂を望むソメラール通り9番地の下宿がフランス滞在1年間の根城であった。ドイツ滞在中は方々の美術館を訪れた福本であったが、パリ滞在中はカルチエ・ラタンの下宿に籠って原稿を執筆するほかは前田の下宿に行ったり夜の街に繰り出したりするくらいだった。工場街を描くので一緒に来ないか、という誘いに付きあったこともあった。

福本と前田の回想を並べて引用してみよう。福本は帰国後の前田の方向性に苦言を呈している。前田はパリでの思想的な交流について述べている。

夕方になると、ほとんど毎日のように往来してしたしくすごした。パリで前田は、歴史観、社会観といった方面で、私からしきりに何物かをまなびとろうと期しているもののようには感ぜられた。（中略）

私の希望するところは、かれがあくまで、野党として、ゴッホやセザンヌのごとく至純に、はたらく人々の味方として、あるいはさらにクールベのごとく革命の画家として情熱的に、そのエネルギーな精進の一路を邁進してやまぬことであった。

しかるに、かれが息をきらしながら向かった方向が、官展の特選から審査員への途であったのは、まことに遺憾のいたりで、当時私は、不自由の獄中から八方手をつくし、苦言を呈してやまなかったが、……ついに間違った方向に駆足してしまったのを悲しく思う。（中略）

しかし、それにもまして、私をなぐさめてくれるのは、私と共に、日本海の怒濤うちよせる大砂丘地帯に生育した彼が、その臨終の日まで病床にあって、筆を加えることをおこたらず、ついに犬吠岬の怒濤をかいた『海』の大作数枚の傑作を仕上げ、世にのこしてくれたことである。（『霧笛』42-43頁）

前田君はパリにきてもしばらくはゴッホ流の点描法で、労働者の家族を描いたりしたが、ついに写実派のクールベを見出し、日本にかえると写実研究所を開いて画学生を指導したり、クールベの評伝をあらわしたりしたほどであった。前田君の最期の

傑作、銚子の海の連作は、クールベが1871年パリ・コミューンの革命に身を投ずる前年にえがいた怒濤波裏の連作にヒントをえたものとおもわれる。しかしクールベのような革命の画家とはついにならず、駆足で帝展の特選から、審査員のコースを歩むとともに、そののぼりつめた頂点でポキリと夭折してしまったのは遺憾であった。（『裸像』19頁）

クールベ（1819-1877）は写実主義の巨匠であり、晩年にパリコミューンに参加して亡命先のスイスで失意のうちに亡くなった。代表作は発表当時には酷評された『オルナンの埋葬』（1849年）、『画家のアトリエ』（1855年）で、ともにオルセー美術館に所蔵されている。福本が言及しているクールベの1970年の作品はおそらく『波』（スイス、オスカー・ラインハルト美術館所蔵）であり、後に北斎を論じた福本が世界的な傑作『神奈川沖浪裏』の強い影響を推測している（『福本和夫著作集 第5巻 葛飾北斎論』こぶし書房、2008年、201頁）。

引用中の「官展」「帝展」は1907年に始まった文部省主催の美術展である。「文部省美術展覧会（文展）」から「帝国美術展覧会（帝展）」、戦後は「日本美術展覧会（日展）」と名称を変え現在でも日本最大の美術展覧会として開催されている（1959年以降は公益社団法人日展が主催）。前田は1927年の帝展で特選、翌年も特選、1929年には無鑑査となる。1928年に「前田写実研究所」を開設。1929年に帝展に出品した『海』で帝国美術院賞を受賞、1930年に帝大附属病院で鼻孔内腫瘍のため死去した。享年33。著作としては『クルベエ』（アルス美術叢書、1928年）がある。

「野党として、ゴッホやセザンヌのごとく」とは、官展である「サロン・ド・パリ」（王立絵画彫刻アカデミー主催）を落選した画家たちの中から印象派など新しい美術運動が生まれてきたことを示しているのだろう。福本は、フォーヴィズム的筆致が「前寛ばり」という流行語を生み美術界の寵児となった前田が体制側の画家として出世の階段を昇っていくことを苦々しく思っていた。なぜ、その才能を民衆のために使わないのか、と。前田は帰国後にプロレタリア画家たちから日和見主義、頹廢的耽美主義と批判される。

前田はパリ時代に『二人の労働者』（1923年、大原美術館所蔵）、帰国後に傑作『棟梁の家族』（鳥取県立美術館所蔵）を描いており、労働者階級に思いを馳せていないわけではない。福本が政治に身を投じてからも交流があり、「3・15事件」（1928年、治安維持法による歴史的な大検挙、福本は後に「安政の大獄よりよほどひどい」といった趣旨の発言をしている）の直後に一時かくまったこともあった。

前田も2回、特高（特別高等警察）に検束されている。1927年には『福本和夫氏像』（鳥取県立美術館所蔵）を描いた。生前の福本はずっと大切に手元に置いており、死後、鳥取県立博物館に寄贈された作品である。（戦後に編集されたエッセイ集『寫實の条件』（原書1965年、新装版1999年、中央公論美術出版）は前田の画論を知るために参考になる。なお巻末掲載の年譜の留学開始時期が1年遅くなっている。）

パリ時代、前田は福本をどう見ていたか。

前田と親しかった美術評論家の外山卯三郎（1903-1980）は遺品の中から「巴里滞在中の手記」を発見する。以下は詩人で美術評論家の岡田孝彦が手記を要約したものである。前田は自分のことを「前田」と客観視している。

パリで二人が会った時分には、二人の性格はほとんど一致点をみだし難いほどへだたっていた。福本は純科学的実証から社会ないし人生を批判しようとしているし、前田は直感から美は得られるものとして純真をもって生活の基調とすることを希っていた。それで一方は他方を時流に左右されて生活する凡庸な人間とみかぎり、他方は一方を熱情が人生の底からあふれることの無いひからびた学者のようにみなしていた。……そのころ福本は唯物史観の立場から現下の社会を資本主義の行詰まりの状態としてとらえており、社会組織に対して燃えるような憤怒をもっていた。前田の、美術のアカデミックな伝統に対する反抗は、福本の、現代の社会組織に対する反抗と似ていた。（中略）二人は共通したある感情をもっていることを諒解したのであった。（中略）福本の作品に下す批評は何の価値もないくらい、幼稚なものだった。それにもかかわらず、唯物史観から芸術の変革の経路を推断する言葉は、前田が獲得しようとしてどうしても果たせなかった一つの真理にまでつきいつていたので、そのつど前田は福本の批判に睦みざるをえなかった。（岡田孝彦「前田寛治と福本和夫」1967年、前掲『福本和夫の思想』所収、300-301頁）

福本と前田は親友としてパリでともに過ごし、思想家と芸術家という異なる立場から互いを切磋琢磨した。前田は二人の関係をクールベとブルードン（1809-1965、社会主義者、「アナーキズムの父」と言われる）の関係になぞらえていたという。前田との交流なくして、福本が北斎論をはじめとした芸術論、文化論をも包摂した日本ルネッサンス史論を着想することはなかった。二人は生涯の友であった。獄中にいた福本は2年間の闘病生活に苦しむ病床の前田を

励ますことはできず、彼の死に立ち会えなかった。その悔しさ、悲しみはいかばかりのものであっただろうか。

文部省による留学期間は2年間であった。福本は半年間の留学延期を願い出て許可された。滞在費用は自費でまかなった。前田と会う以外は寝る間も惜しんで3本の草稿をまとめ上げた。いずれも帰国後に刊行されて福本イズムの基本書となった。

第一の「社会の構成並に変革の過程」は、マルクス主義の歴史の見方、すなわち弁証法的唯物論に立脚した歴史の見方、……その基本的な構造、組立てをあきらかにしたものであった。

第二の「経済学批判の方法論」は、マルクス主義経済学の方法論を積極的に展開した上で、……各派経済学の方法論を比較し論評したものであった。

第三の「党組織論の研究」は、一口にいうならば、マルクス主義政党的組織論問題を論じたものであるが、レーニンのロシアでは革命がみごとに成功したのに、ローザ・ルクセンブルグやカール・リープクネヒトらのドイツではなにゆえ中途半端で失敗挫折してしまったのかという観点から、それを、レーニンとローザの党組織論を比較論究することによって、理論の上からばかりでなく、歴史的事例からもあきらかにしようと試みたところに私の苦心があった。（『裸像』16－17頁）

日本のマルクス主義者でこれほどまでに方法論を徹底的に研究した者はいなかった。とりわけ党組織論にはドイツ革命から間もない当地に滞在した者にしか書けない緊迫感があった。日本のインテリたちが福本の初期著作群に驚愕したのは無理もない。

草稿をまとめ上げた福本には大きな仕事が残っていた。買い漁った数万冊の古本、新刊本のリスト作成である。

留学生の身分で、数万冊の書物とはすこし大げさにすぎはしないかと不思議におもわれるかもしれない。しかし、当時のドイツやオーストリアは極度のインフレで、なにしろ信用状で所持している英貨ポンドを銀行でマルクに取替えてもらうために札入れでは間にあわず、いつも一杯にカバンをふくらませてかえったほどで、額面の上ではわれわれ留学生もよいに百万長者でありえたわけだ。したがってお話にならぬ廉価で、これはひどい搾取ですまないと内心大いに気の毒におもいながら、かいあつめたものであった。（『裸像』18頁）

パリ留学中の思い出の一つに「レーニンの遺書」があった。福本と親しかった石見尚は、戦後に左翼陣営の多くの人たちがスターリン（1878-1953、フルシチョフ（1894-1971）による「スターリン批判」は1956年）を盲信、偶像視しているのを、なぜ福本が冷ややかに眺めることができたか、その理由を直接聞いたことがある。

福本和夫はスターリンの個人的欠陥を、フルシチョフによる、いわゆる「スターリン批判」よりはるか以前に知っており、スターリンの人格に疑問を持っていた。帰国前（1924年1月カー岩田注）のパリの街頭で売られていた新聞には、レーニンの死去の報道とともに「レーニンの遺書」について報じられていたからである。レーニンはスターリンの粗暴性、少数民族に対する弾圧を非難し、書記長の職を解任すべきこと、またレーニン夫人に対する無礼な扱いをめぐってスターリンとの絶交を決意することを述べていた。スターリン批難の情報は、西欧では誰でも容易に入手できた情報だったと福本和夫は言っていた。

（前掲『我々ハ犯罪者ニ非ズ』115頁）